

週刊センターニュース

No.128



第128号(2006年10月2日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

センター人事報告

「金沢大学大学教育開発・支援センター長、センター教員及び客員教授等選考規程」に従い、教育企画会議からの委員を含む審査委員会の審議、および、センター教員会議における審議を経て、10月1日付けで、学長より、大学教育研究開発部門西山宣昭助教授の教授昇格の発令がありました。これではやく、当センター3部門すべてに教授が揃いました。

今後とも「センターは、学内共同教育研究施設として、金沢大学(以下「本学」という。)における教育方法、教育システム、評価システム及び学生支援体制の研究開発を行うことにより、本学が行う教育の充実・発展を図るとともに、本学が掲げる基本理念及び目標の実現に資することを目的とする」(センター規定第2条)に従い、5名の専任教員が一体となって、本学の教育改革に努めてまいります。教職員の皆様方のご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。(センター長 青野 透)

青野センター長より上にご紹介いただきましたように10月1日付けで教授昇格となり、当センターの職務を全うすべく全力を尽くしたいと存じます。今後ともご指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。(大学教育研究開発部門 西山宣昭)

「私立大学フォーラム 国立大学の行方と私立大学のあり方」参加報告

9月30日に日本私立大学連盟主催の標記フォーラムに参加した。まず奥島孝康氏(早稲田大学事顧問)より基調講演がなされた。法人化移行2年が経過し、国立大学も財政運営や学生募集など様々な面で苦戦し始め、国公私競合時代の幕開けと見ることができている中で、総長時代の経験を下に、私立大学が進むべき道を示唆された。重要であると思った意見は、学部レベルの教育コンソーシアム、そして大学院レベルでの研究コンソーシアムの形成など、私立大学間の相互協力が必要であるのではないかと、大学の未来を切り拓くために、学内の一体化という意味で、建学の理念をもう一度見直し、また柔軟なグランドデザインを描く必要があるということ、国立大学以上に、私立大学は機能的にもっと棲み分けしていかなければならず、「生涯学習」と「国際化」の二方向を組み合わせる形で改革を進めていくべきという点である。

次に、安西祐一郎氏(慶応義塾塾長)、相澤益男氏(東京工業大学学長)、宮内義彦氏(オリックス取締役)の三氏による報告がなされた。安西氏は、高等教育の主体として、多様な人材やスキルを創造し、多様性の源泉となるべきであること、そうした私学の役割の重要性を再確認すること、今日、私立大学の発言力とエネルギーが求められており、日本の高等教育を変革するのは私立大学の活力に懸かっていると訴えた。相澤氏は、国内外の大学改革動向に概観した上で、「ステイクホルダーは誰か?」「それぞれの国立大学の特色は明確か?」「国立大学のメリットは何か?」の3つの観点から新しい国立大学のあり方を改めて考えるべきであると述べた。また、教育において規制を緩和することが、最終的に質を保証するのかどうかはなはだ疑問で、改革が進んで様々な問題も出てきたので、細かい部分について慎重に検討していかなければならないと触れた。最後に、日本の(私立)大学を客観的に評価してもらうことを期待されて登壇した宮内氏からは、何よりも「教育=サービス業」であるという意識が必要であること、サービスの受け手の視点 創意工夫を凝らした大学間の競争、特

徴ある大学作り ガバナンス体制の構築の3つの点について、法人化後の国立大学はこうした視点を取り入れつつあると見られるが、私立大学の現状はどうか、再検討すべきであると述べた。また奥島氏同様、見えざるステイクホルダーとして「建学の精神」の重要性を指摘したことは印象的であった。

以上の報告の後、質疑応答がなされ、例えば、学生の質が非常に低下している中で、マンモス化した私立大学が果たすべき役割はとの質問に対し、「自分でカリキュラムを作るぐらいのつもりで自分の道を切り開く力(人間力)を有する学生がいないのが正直なところで、講義で行われるものだけが大学の教育であるという考えは捨て、この意味で大学教育の見直しが必要、感動を通じてモチベーションを高める場をどのように提供できるかが、解決すべき所ではないか」(相澤氏)「高等普通教育の段階に入ったのであり、総合力を身につけさせる教養教育の充実が必要」(奥島氏)といった意見は、傾聴に値する考えであると思われた。

最後に、このフォーラムは全国7会場で順次開催されており、以降の予定は「大学教育の本質を考える」(10月21日、仙台)「大学における人間力育成と社会の評価」(11月4日、福岡)「大学のガバナンス」(11月25日、大阪)となっている。関心のある方は、是非参加して頂きたい。

(文責:評価システム研究部門 渡辺 達雄)

大学教育学会のシンポジウム紹介

すでに週刊センターニュース上でお伝えしていますが、11月25日、26日に本学で大学教育学会課題研究集会が開催されます。そこで、皆様に、簡単なテーマ解説や、シンポジストの紹介を通じて、大会に関心を持って頂こうと考え、6回にわたって、関連情報を連載することにしました。1回目は、シンポジウム「学士課程教育に初年次教育をどう組み込むのか」(11月25日、15:15-17:45)です。

主旨:本シンポジウムは、これまで3年間初年次教育・導入教育研究委員会が研究を積み重ねてきた成果のまとめであり、「初年次教育」あるいは「導入教育」と呼ばれる教育プログラムについて、現状分析と今後の活用についての具体的方法と課題の整理を行う。具体的には、概念の整理、日本でどのような教育効果をもたらす可能性があるのか、どのように導入していけばいいのか、評価をどうすればいいかなどについて、日米の第一線の研究者と実践者を集め、議論し、整理していく。

1. 初年次教育・導入教育研究委員会報告(1)「調査データからみた日本の初年次教育」
「学生パネル調査から明らかになった日本における初年次教育の可能性」:白川 優治(早稲田大学)
「大学機関調査からみた日本における初年次教育の可能性と課題」:山田 礼子(同志社大学)
2. 初年次教育・導入教育研究委員会報告(2)「日本の初年次教育・導入教育GP選定の試み」
:川島 啓二(国立教育政策研究所)
3. シンポジウム 司会:近田 政博(名古屋大学)
Randy Swing(アメリカ・Policy Center on the First Year of College)「初年次教育はいかに(アメリカの)学士課程教育改革に影響したか(仮題)」(通訳:吉原 恵子)
濱名 篤(関西国際大学)「初年次教育・導入教育・キャリア教育・リメディアル教育との関係~学士課程教育の観点から~」
山田 礼子(同志社大学)「初年次教育のための組織体制づくり」
川嶋 太津夫(神戸大学)「初年次教育の評価をどうするか」

共同研究の形で、長年にわたり、初年次教育・導入教育についての理論的検討、アンケート調査や訪問調査による国内外の動向把握、日本の大学教育への適用性(効果)課題とその解決方法について総合的に報告がなされるものと期待できます。本学で実践されている「初学者ゼミ」や「大学・社会生活論」の運営面においても、有益な情報が得られるものと思います。

(評価システム研究部門 渡辺 達雄)